

# 『竹園抄』 翻刻

——早稲田大学蔵本及び刈谷市中央図書館村上文庫蔵本——

梅田 径  
浅井 美峰

本稿は、早稲田大学蔵『竹苑抄』（請求番号…へ四 四四二七）、刈谷市中央図書館村上文庫蔵『竹園抄』（函架番号…2530）の翻刻である。書名の表記は様々であるが、一般的には『竹園抄』が通行しているため、普通書名としては『竹園抄』を使う。『竹園抄』は、鎌倉時代に成立した歌学書で、刊写合わせて一〇本を越える伝本に恵まれている。歌道家による正統的な歌学書ではなかったが、鎌倉時代以降、広く流通して重宝された。一部口伝も含まれると思われるその伝本は複雑を極め、系統分類も未だ詳らかではない。『日本歌学大系』には寛永版本を底本として諸本で校合を加えた本文が収載されており、現在も利用されているが、その他の伝本については、鎌倉期に遡りうる古写本（国立国会図書館蔵本、尊経閣文庫蔵本、国文学研究資料館蔵本）を除き、その本文はほとんど紹介されていない。今回翻刻するのは、梵灯庵著かとされる『長短抄』と一定の近さを見せる同系統の伝本二本である。詳しい解題は別稿で行う。ごく簡単に書誌のみ記しておく。

早大本は外題ナシ。縦二七・二×横一九・六糎。四ツ目綴。原装代赭色表紙。内題「竹苑抄」、前遊紙一丁。墨付二四丁。墨筆全同筆。わずかに朱点が付される。

刈谷本は外題「竹園抄」。外題の「園」の字は「草冠に門、袁」という特殊な異体字であるが、便宜上「園」で記す。左肩書題簽。縦二三・七×横一七糎。五ツ目綴。原装紺地表紙。内題「竹苑抄」、「大和歌手尔葉式」。墨付四四丁。「竹園抄」部分は三二丁。墨筆全同筆ながら、圈点、合点、△、鉤点、傍記など朱筆。「大和歌手尔葉式」の奥に「享保三年正月十五日 掌静堂」の年次あり。ほか享保十七年、明和六年の書写奥書あり。

#### 凡例

一、上段に早大本、下段に刈谷本をおき、字詰め、字下げなどは可能な限り原本に忠実とした。丁移りはカギ括弧（―）で示し、その下に丁数及びその表裏を「丁数オウ」で示し、丁の変わり目の空白行は（ ）で示した。早大本にみられる重ね書きについては末尾の「校勘記」に示した。

一、事、紙、恋、変、会、座、読は通行字体で統一した。一方で、体・躰、声・聲、苑・園、哥・譌などは底本の字の通りとした。

一、片仮名、平仮名の別は平仮名を主としたが、ルビや送り仮名において明確に使分けられている場合は片仮名とした。

一、和歌の書式は、書写面の様相を保存した。

一、途中にある和歌座敷会席図は（会席図）として図版を示した。また、両書ともに末尾には追加と思しき五十音図および五音図があるが、この内五音図も会席図同様、〔五音図〕として図版で示した。

一、刈谷本には『竹園抄』に続いて「大和歌手尔於葉」が合冊されるが省略した。

一、基本的な翻刻は早大本を梅田が、刈谷本を浅井が担当したが、相互に確認・校正を行い、最終的なとりまとめと解題の執筆を梅田が行った。

(外題ナシ)

竹園抄(外題)

竹苑抄

竹苑抄一卷

五音相通連聲読調次第

五音相通連聲読哥次第

第一 可謂嫌病事 二 可対詞事

一 可哥嫌病之事 一 可対詞之事

三 親句疎句事 四 六義事

三 親句疎句事 四 六義之事

五 取本謂事 六 返事躰事

五 取本哥事 六 返事躰之事

七 謂題可存知事 八 懷紙事一オ

七 哥題可存知事 八 懷紙之事

九 披講事 十 指名物存知事

九 披講之事 十 指名物題存知事

十一 風躰事

十一 風躰之事

(五行空白) 一ウ

(二行空白) 一オ

一 謂病事

(二面空白) 一ウ

一 歌病事

抑古人おほく哥の名をつくいはゆる四病八病等也

抑哥の病と名付て古人のおほく記す処なり所謂

しかりといへともちかくきらわさる事おほししかればな

り所謂

かくいたつらに詞おほくて初心なるものは言葉にま

四病八病七病七妄八悩等なりしかりといへとも近代不嫌事おほし然はなかくいたつら

とひぬへきゆへに要をとりて六のやまひをしらせり

ことは多して初心の人は迷ぬへし故に要を

一ニ同ことは二ニ同字三ニ乱思病四ニ風傍のやまひ五ニハ片

題病六ニハ首尾病一ニハ同詞の病とは一首のうちにお  
なしことはのあまたありて耳にたつなりたとへは

なにはつにさくやこのはな冬こもり

いまは春へとさくやこのはな

さくや此はなといふこと葉あまたありむかしはかく

もよみ侍れとも近代はかやうによますた、し疊句の哥」ニオ

といふ事有それはくるしからす哥にいはいはく

みよし野のよしの、山はしら雪の

雪けにくもる冬そのうき

みよしの、吉野しら雪のゆきけになをしことほなれ

とも疊句にてくるしからす又上下の句にわたらされ

とも上句はかり下句はかりにもおなしこと葉のみ、に

たつは哥のかたちにくきや

二同字のやまひとは一首の哥に同字さしあひて

き、にくきなりたとへは

花をみてはるはなくさむ木のもとに

鶯なきてさひしかりけり

花をみてのてとなきてのてと聞悪也又いはいはく

山はみな秋とそみゆる木々ははや」ニウ

ところ／＼にもみちしぬらむ

とりて六病を記す也一同語病二同字病

三乱思病四風傍病五片題病六首尾病

一同語の病とは一首のうちに同しことはの

あまりてみ、にたつなりたとへは」ニオ

難波津にさくや此花冬籠

いまは春邊と咲やこのはな

咲や此花といふ言葉あまた有むかしはかく

もよみ侍れとも近代はかやうによます但し

疊句の哥といふ事有それくるしからす

哥にいはいはく

御吉野のよしの、山はしらゆきの

ゆきけにくもる冬そのうき

み吉野の吉野しら雪の雪けは同じ言葉

なれとも疊句にてくるしからす又上下の」ニウ

わたらされとも上句はかり下句はかりに

もおなし言葉のみ、にたつは哥の形悪や

二 同字の病といふは一首の哥に同字のさし合

ていたくき、にくきなりたとへは

花を見て春はなくさむ木本に

鶯鳴てさひしかりけり

山はのはと木々はのはとき、にくきなり如此上下  
の句のあいたにても一句の中にてもてにはの字もし  
は物の名言の字にても耳に立をきらふへし物  
の名とことはとさし合哥

うくひすもみえずなりぬるかすみかな

木のもとくらきはるのゆふくれ

鶯のすとみえずのすと是をきらふなり

三乱思病とは哥の心のきこえずことにもなき

うたなり哥は道理をむねとしてそのうへにこと葉

をかさるへししかるにことわりの聞ぬは哥にあらす

よくくきこふへきなりたとへは

さかの山雲あるころはみかりする」三オ

おはなかつ糸の穂のゆふくれ

是はこと葉つ、きたれとも道理きこえずたとへは

春の夜の夏のうきはしとたへして

みねにわかる、よこ雲の空

これは乱思病の哥なりたとひそこにかなる本

文おもかまへ面に理なからんうたは此病のかれかたし

四風傍のやまひとはむねとよむへき題おはそはに

なしてことなることにかゝる哥なりたとへは花月

花を見てのてと鳴きてのてとか聞にくき也又

山はみな秋とそ見ゆる木々ははや

ところくにもみちしぬらん

山はのはと木々はのはとき、にくきなり如此上下」三オ

の句のあひたにても一句の中にてもはの字に

は物の名言の字にても耳に立をきらふへし

物の名とこと葉など指合哥

鶯もみへすなりぬる霞かな

木の元くらき春の夕暮

鶯のすと見へすのすと是をきらふなり

三 乱思病とは哥の心のきこへすことにもなき

哥なりうたは道理をむねとしてそのうへに

こと葉をかさるへし然にことほりの

聞へぬは哥にあらすよくくきこふへき也たとへは」三ウ

さかの山雲あるころはみかりする

おはなかつ糸の秋の夕くれ

是は言葉つ、きたれとも道理きこへすたとへは

春の夜の夢のうき橋とたへして

嶺に別る、よこ雲の空

是は乱思病の哥なりたとひそこにはいかなる

を題にてよむへきに花月ゆへに雲のいとわしきといゝて雲のみに心をかけて花月に心おいいぬ  
哥なりたとへは

山さくらそれともみえずしらす雲の

なへてたちぬるみよし野、山」三ツ

是はいかにも雲のかゝらはかゝれ花はつとにしろくおもしろ  
しとこそよむへきに花はそれともみえず雲のみ  
かゝるとよめる風傍のやまひなり後白河院の御時宇  
治にて哥合ありしにある女房紅葉といふ題にて

入日さすおのへの雲のくれないに

うつるやよそのもみちなるらん

此哥風情もやさしくてよきうたといひきため  
られしかとも風傍の病のかれかたくてまけにさた  
められぬいかにいり日は雲にうつるとも紅葉をは  
みせてこそよかるへきに入日の雲や紅葉にてある  
らむとよめる題の為にはめんほくなき哥なり

他准之

五片題病とは長題に片方をはほめてかた／＼そしる」四オ

哥なり是つねに人のあやまる病なりたとへは名所  
の月といふ題に

『竹園抄』翻刻

本文をもかまへよ面に文理なからん哥は此病  
のかれかたし

四 風傍の病とはむねとよむへき題をはそはに

なしてことなることにかゝるうた也たとへは花」四オ  
月を題にて読へきに花月ゆへに雲のいとわし  
きといゝて雲のみに心をかけて花月に心をいれ  
ぬ哥なりたとへは

山さくらそれとも見へすしらす雲の

なへてたちぬる御吉野、やま

是はいかにも雲のかゝらはかゝれ花はことに  
しら／＼おもしろしとよむへきにはなは  
それとも見へす雲のみかゝるとよめる風傍  
の病なり後白河院の御時宇治にて哥合  
有しにある女房紅葉といふ題にて」四ウ  
入日さすおのへの雲のくれないに

うつるやよそのもみちなるらん

此哥風情もやさしくよき哥といひきたありしか  
とも風傍の病のかれかたくてまけに定められ  
ぬいかに入日は雲にうつるとも紅葉をは見せて  
こそよかるへきを入日の雲や紅葉にてあるらん

あかしがたくまなきなみのうへなれば

ところからにて月はすみけり

是は村上の御時もちあつかいさたせし片題の

哥也作者しるさすこの月は明石かたにすますは

いたつら物ときこえたりあかしといふ名のもりなり<sup>(1)</sup>

浪なればこそ月はすめさなくはすましとよめり

また鳥羽院の御とき頼政片題の哥に月の前

の花といふ題にて

月影のうつらさりせは山さくら

はるやは夜のにしきなるへき

これも月のみほめて月ゆへにこそ花おもみれむね」四ウ

とすへき花はいたつら物にて侍り

六首尾のやまひとは上句の初の五の句と下のおはり

の句とかけあわぬ哥なり哥はいかにも上下むすひあわせ

であるを哥とはいふなりかみしもかけあわざるはた、

こと葉おふたつならへたるかことし和哥にいはいく

おもひきや太山のおくのさひしさは

雪ふりうつむ冬にもあるかな

上句におもひきやと云は下句のおわりに思ひきやとい、

つることはをうけて物おもふともかゝるすまひをす

とよめるは題のためにはおもしろくもなき哥なり

これらにて心ろふへきなり

五 片題病とは長題に片方をはほめてかた／＼そしる

哥なり是つねに人のあやまる病なりたとへは」五オ

名処の月といふ題に

あかしがたくまなきなみのうへなれば

ところからにて月はすみけり

是は村上の御時もちあつかいさたせし片題のうた

なり作者しるさす此月は明石かたにすます

はいたつら物ときこえたりあかしといふ名の

くもりなき浪なればこそ月すめさなくは

すましとよめりまた鳥羽院の御時頼政

片題の哥に

月かけのうつらさりせは山桜」五ウ

花やは夜のにしきなるへき

是も月のみほめて月ゆへにこそ桜の花をもみ

たりむねとすへきはなはいたつらものにて侍り

六 首尾の病とは上の句の初の五の句と下のおはり

の句とかけあはぬ哥なり哥はいかにも上下むすひ

あわせて有を哥とはいふなり上下もかけあわさ

なともいふへし是をよくく心得すまして哥を  
よみ侍へき事なり

一 対言とはこのみちによく秘する物なりそのゆへは哥をよ  
むとおもへとも上下のことはたいするやうをしらされは」五オ  
哥にあらす対言と云はたとへは問答のことし上句にいふこ  
とを下句に心をあらはすなりたとへは上に桜といは、  
下にほふともさくはな霞木陰なと花にゑんあるこ  
と葉を対すへし上に月とあらんに下に雲なしとも  
さやけしとも対すへし是について雙対乱対とて二  
あり双対とは首と首とを対しなかと中とをたいし  
下にしもお対するなりたとへは

さくら花さきにけらしなふく風も

におへるかたになひくしら雲

桜花といふ対にほふとよみ吹風にしら雲と対する  
なりこれにあまたのしなありかみに桜とよみて下に  
花と対するやうも有これおなしものなれともこと葉かは  
りぬれば上下対してくるしからすまた上三句下二句の」五ウ  
物なれば上下をたいしてなかを略するやうもあり大意  
をもつて大かたをたいするやうもありそのやうと云は

久かたのあまつみそらの雲はみな

るはた、言葉をふたつならへたることし本哥  
にはく

おもひきや太山のおくのさひしさは

雪ふりうつむ冬にもある哉」六オ

上句におもひきやと云は下句のおほりにおもひ  
とい、つること葉をうけてものをおもふ  
ともかゝるすまひをすともいふへし  
是をよくく心得すまして哥をは詠侍  
るへき事なり

一 対言とはこのみちによく秘する物なり其

ゆへはなをよむとおもへとも上下の言葉た

いする様としらされは哥にあらす対言と

いふはたとへは問答のことく上句にいふことを下句に

心をあらはすなりたとへは上にさくら」六ウ

といは、下に句ふとも咲くちる霞木陰なと花に

えんあること葉を対すへし上に月とあらん

に下に雲なしともさやけしとも対すへし是に

つゐして雙対乱対とて二有双対とは首とか

しとをついし中と中とを対し下にしをもをたあ

するなりたとへは

月にはれゆく山の種かせ

是は久かたに月をたいし雲には風をたいする也  
これなかを略する対なり

玉川の里の卯のはなさかりとも

みゆるはかりに月そさやけき

是卯のはなに月を対するなりなかを略する  
哥なり大意の対といふは

ほのくどあかしのうらのあさ霧に

嶋かくれ行舟おしそおもふ

これは上句に明石の浦と云て下句に嶋かくれ行船と」六オ  
たいするなりこれらは大意の対なり乱対といふに  
また二種有一には上句のはしめのこと葉を下句の  
おわりにたいしてなかおうへにたいし下お中に対  
するなり本哥曰ク

梅の花それともみえず久かたの

あまきる雪のなへてふれ、は

是は上におたいし梅に雪をたいするなり

さくらはなさきにけらしな足引の

山のかひよりみゆるしら雲

是は上下にたいする哥なり桜花に雲おたひする

桜はなさきにけらしなふく風に

匂ほへるかたになひくしら雲

桜花といふ対に匂ふと読吹風にしら雲と対す

る是にあまたのしな有上に桜と読て下に花と対」七オ  
する様もあり是おなし物なれとも言葉かはりぬれば

上下に対してくるしからす又上三句下二句の物

なれば上下をたいして中を略する様もあり

大意を以大かたたいする様も有其様と云は

久かたのあまつみ空の雲はみな

月にはれゆく山の秋かせ

是は久かたは月をたるし雲に風を対するなり

是中を略する

玉川の里の卯の花さかりとも

見ゆるはかりに月そさやけき」七ウ

是は卯のはなに月をたいするなり中を略する

哥なり大意の対と云は

ほのくど明石の浦の朝きりに

しまかくれ行船をしそおもふ

是は上句に明石のうらと云て下句に嶋かくれ行

ふねと対するなりこれらは大意の対なり

なり二に上のこと葉をことくくうけねとも上にある木草月花などを下句に對せねとも心はかり對するなりたとへは」六ウ

月やあらぬはるやむかしの春ならぬ

わか身ひとつはもとのみにして

是は月も春も下にたいすること葉はなけれども

心はかりの對なり大方うたは千萬お、しといへとも

この四の對にはすくへからす哥をよまん人は此哥

およくくく心得てよむへきなり是はことに哥の秘事

なりたやすく人にゆるすへからすいかに徳をそな

へ六儀た、しき哥なりとも一切は對言によるへき

なり對言のしとけなからんは哥にあるへからす

三親句疎句事これ又哥道の秘事ゆ、しき

大事也よくくこれを心すへしく

一親句において二儀あり一ニ響の親句二三ハ正親句

なりひ、きの親句について又二種あり一ニハ五音」七オ

相通二三五音連聲なり五音相通はゆ、しき秘事

なり五音連聲五七五七々の句のうつりのひ、き

なり響のきれるつる調はいのちのなきうたなり

ほのくくとおちの外山にきなくなり

乱對といふに又二種有一には上句の初めの言葉を下句のおわりに對して中をうへにたるし下句中に對するなり本哥に云

梅の花それとも見へす久堅の」八オ

あまきる雪になへてふれ、は

是は上に中を對し梅に雪を對するなり

桜花咲にけらしな足引の

山のかひより見ゆるしら雲

是は上下に對する哥なり桜花に雲をたゐする也

二にかみの言葉をことくくうけねとも上に

有木草月花などを句に對せねとも心はかり

對する也たとへは

月やあらん春やむかしの春ならぬ

わか身ひとつは本の身にして」八ウ

是は月も春も下に對する言葉なけれども心はかり

の對なり大かた哥は千万お、しといへとも此四の

對には過へからす哥を読ん人は此哥をよくく

心得て読へき也是はことに哥の秘事なり

たやすく人にゆるすへからすいかに徳をそなへ

六義た、しき哥なりとも一切は對言によるへき

しはしかたらへねくらさためて

是はほと、きすをよめる詠なり昔の哥はなにとかたちおあらはさねともかくもよみ侍り當世はかゝるへからすほのくとおちといふはおのひ、きなりしはしといふはいの響也余これにてしるへしかくのごとく五句のつ、きひ、きのはなれざるを五音連聲の親句といふ也

二正親句といふ響つ、かされともこと葉されたる哥也正躰およむとその躰おはなれざる哥なりたとへは「セツ

よし野山峯のさくらのちりしより

はなはあたるものこそしれ

吉野山といひてやかてみねとつ、き桜といひてやかて散といひて花とある是正親句の哥也これと哥万徳のなかの意也たとへは六義九章のよき哥なるへし亦五音相通といふは五音のうちにいづれへもくるしからすとへは

あさ霞みねの木すへもみえぬまに

たちかくしけり花の香はして

朝霞のみともとはまみむめもの五音のうちなりもみといふもうへにおなしまてのてとたちのたとはたち

なり対言のしとけなからんは哥にあるへからす

三 親句疎句事はまた哥の道の秘事ゆゑ、しき

大事なりよくく此をひす可し

一 親句に二の義有一には響の親句二には正親句なり」九オ

ひ、きの親句につゐて又二種有一には五音相通連聲

なり五音相通はゆゑ、しき秘事也五音連聲

五七五七七の句のうつりのひ、きのきれつる哥は

命のなき哥なり

ほのくとをちの外山に來鳴かり

しはしかたらへねくらさためて

是はほと、きすを讀哥也むかしの哥はなにと

形をあらはさねともかくも読侍なり當世はかゝる

へからすほのくとをちといふはをの響也しはし

といふはいのひ、き也余は是にてしるへしかくのごとく」九ウ

五句のつ、き響のはなれざるを五音連聲の親

句といふなり

二には正親句といふは響つかされとも言葉きされざる

哥也正躰をよむことその躰をはなれざる歌なり

たとへは

吉野山嶺の桜のちりしより

つての五音なり是おもつて一切心得へし

一 疎句といふはひ、きもかよはずこと葉もきれたれとも」八〇オ  
心はなれぬ哥也これはよくひろふの哥なりよみや  
すき様なるへし

一 六義に付て三種の差別有性躰形なり躰正の六

義といふは形の二種也きわめたる大事の秘事も

故にしるさず口伝しならふへし性の六義といふは

フウフヒ キヤウカシヤウ  
風賦比興雅頌

一 風といふはそへ哥なり是本意をおもてにあらはさて

よその物にいひあらわしてその心をうる哥也たとへは

なにはつにさくやこのはな冬こもり

今ははるへとさくやこのはな

此詩は仁徳天皇の御弟宇治の稚倉宮とたかひにくら

いをゆつりて国に王なき事三年也兄はおと、こそ

父應神天皇のゆつりお得給たれば位につき給は」八ウ

めとてうけとり給はず弟は兄を置たてまつりて位

に即へからすとてゆつりたてまつり給けるを弟

われかくてあれはこそ位につき給はねとてついに

病死給へりしかるあいたちからなく仁徳位に即給

けりそれを王仁大臣よめる哥也難波つとは仁徳

花はあたな<sup>るも</sup>ものところしれ

吉野山といふてやかて嶺とつ、き桜といふてちると

花月は正親句の哥なり是和か万徳の中

の心也たとへは六義九章のはる、といへとも」二〇オ

かくのことく読んは能哥なるへしまた五音相

通といふは五音の内につれへも付るくるし

からすたとへは

朝かすみみねの木すゑも見へぬまで

たちかへしけり花の香はして

朝霞のみともとはまみむめもの五音の内なり

もみといふも上にうちまてのてとたちとのた

とはたちつての五音なり此をもつて一切心得へし

疎句といふは響も通す言葉もきれたれともこ、ろ

はなれぬ哥也是はよくひろうの哥なり読やすき」一〇ウ

様なるへし

一 六義に付て三種の差別有性躰形なり躰正の

六義といふは形の二種也極たる大事の秘事なるが

ゆへに不記口傳し習へし性の六義と云は

フウフヒ キヤウカシヤウ  
風賦比興雅頌なり

風と云はそへ哥なり是本意を面にあらはさて

の御座家の名也なにはつにさくやこの花冬こ

もりといふは位につき給へき花咲たれともいまた

時の花にてなければ冬籠といふ也今ははるへと

咲や此花といふはいまこそ時の花よとよめる也

此哥おもてにはすへて仁徳天皇の御事聞えぬ

とも底はかの御事也かゝる哥を風躰の哥といふ也

風といふは諷也諷と云は風の色躰みえねともよその

物にあたりて風としらるゝかことくに風の哥はおもふ」九オ

事をこと物にあらはすなり

二賦の哥とは一首に心のあまたある哥也賦といふ

字おはくはるともつくすともよめりされは一首に

ことをあまたつくしたる哥也たとへは

さく花におもひつく身のあちなきさ

身にいたつきのいるもしらすて

開花とは変心なりいたつきとは文選には勞の字

をつかひ典には煩の字をつかへり文選又文記には

無常をいたつきといえり相如野草か云菴蓬已無常と

いへり

三比哥はたくらへ事の哥也物を二ついつれもおなし様なり

とくらふる哥なり本哥云

余所の物に云あらはして其心をうる哥なりたとへは

難波津にさくやこの花冬こもり

いまは春へとさくやこの花

此哥は仁徳天皇の御弟宇治の稚倉宮とた」二一オ

かひにくらゐをゆつりて国になきこと三年

なり兄は弟こそ父應神天皇のゆつりを請

給たれば位につき給めとて請とり給はす

弟は兄を置たてまつりて位に即へからすとて

ゆつりたてまつり給けるを弟我かくてあれ

はこそ位につき給はねとてつゐに病死給へり

しかる間ちからなく仁徳位に即給けりそれを王

仁大臣読る哥なり難波津とは仁徳の御座

家の名なり難波津に咲やこの花冬籠りとは位に

つきたまふへき花咲きたれともいまた時の花」二二ウ

にてなければ冬籠りと云なり今は春へと咲

や此花と云は今こそ時の花よと読る心也此哥おも

てにはすへて仁徳天皇の御事ときこへねとも

底にはかの御事なりかゝる哥を風躰の哥と云なり

風といふは諷なり諷といふはたとへなり是は風の

色躰見へねとも余所の物にあたりて風と知らるゝ

春にけさあしたの霜のおきていなは」九ウ

恋しきことにきえやわたらむ

是は君に別ていのちの消ぬへき事を霜ときえぬ

へき事にくらふるなり

四興題これたとへ哥なりこれは物を二つならへていそ(マ)

れにたりといへともしかもまた各別にかたちをしる

なり風比興いづれもとふる形ありといへとも風

は心と心とをたとへ比は形と形とをたとへ興はたと

ゑてしかも分別するこのかわりめなり本哥に

わか恋はよむともつきしありそ海の

はるのまさこはよみつくすとも

五稚の哥はた、こと哥なり是は物にたとへすよせ

すすくくとよめる哥なり本哥に云

いつはりのなき世なりせはいかはかり」一〇オ

人のことの葉うれしからまし

六頌の哥これは祝哥也祈祷おは祝といひほむるおは

頌といふなり本哥曰ッ

このとのはむへともみけりさき草の

三葉四葉にとのつくりして

むへといふ道理といふ事なりさきくさとは檜木也是

かごとく風の哥はおもふ事ごと物にあらはずなり

二 賦の哥とは一首に心のあまた有哥なり賦といふ

字をはくはるともつくすとも読りされは一首に

事をあまたつくしたる哥なりたとへは」一二オ

咲花に思ひつく身のあちきなき

身にいたつきのいるもしらすて

咲花とは変心なりいたつきとは文迂には勞の

字を通ひ典には煩の字をつかへり文迂又天記には

無常をいたつきといへり相如野章かいはく蚕食

蓬已無常といへり

三 比哥たくらへことこの哥なり物を二色もおなし

様なりとくらふる哥也

きみに朝あしたの霜のおきこなは

恋しきことにき、やわたらん」一二ウ

是はきみに別て命の消ぬへきことを霜ときへ

ぬへきことをくらふる也

四 興題是はたとへ哥なり是は物を二並ていつれも

にたりといへともしかも又各別に形をしるなり風比

興はいづれもとふる形有といへとも風は心と心

とをたとへ比は形とたちをたとへ興はたとへし

を幸草とは大唐の道州は水にこりて是を吞

ゆへに人の命みしかき也此里には檜木をたつねて

水に在るれば則水すめり依て彼国にはひのき

を幸木といふなり幸字おはさぢといふよみあり

さちといふをちときとおなしひ、きなるゆへにさきと

いふ也草とは種也草にあらず幸の種也日本記云

岩代のはま松かえをひきむすひ」一〇ウ

身にさちあらはとかとんとそおもふ

是は有馬の王子の御哥也三葉四葉は三棟四棟也

本文曰ク

楊国忠依<sup>テ</sup>楊貴妃之寵<sup>ニ</sup>家栄<sup>タリ</sup>三棟四棟<sup>ニ</sup>にいへり

一本哥を取に四の様ある事<sup>一ニ</sup>ハこと葉を取<sup>二ニ</sup>ハ

心を<sup>一ニ</sup>こと葉おかへ<sup>三ニ</sup>ハ本哥の上下句をうちかへて取

四<sup>ニ</sup>ハ本哥の大意おとる也言はかされとも心ひとつなる哥

梅のはなそれともみえず久かたの

あまきる雪のなへてふれ、は

これおとるうた

桜のはなそれともにほふ久かたの

あまきる雪のなへてふれ、は

心をひとつにしてこと葉をかふるうた」一二オ

かも分別する此かわりめなり本哥に云

我恋はよむともつきしありそうみの

はまの沙はよみつくととも

五 稚の哥はた、こと哥なり是は物にたとへすよせず」一三オ

すくく」と読る哥なり

偽のなき世なりせはいかはかり

人のことの葉うれしからまし

六 頌の哥是は祝哥なり祈禱をは祝といひほむる

祝をは頌といふなり

このとはむへもとみけりさき草の

三葉四葉にとのつくりして

むへといふは道理と云事なりさき草とは檜木

なり是を幸草とは大唐の道州とは水にこりて

是をのむゆへに人の命みしかきなり此里には檜」一三ウ

木を尋て水に在るれば則水すめり依る彼国には

檜木を幸木といふ也幸字をはさちといふよみ

有さちといふをちときとおなしひ、きなるゆへ

にさきといふなり草とは種なり草にあらず

幸の種なり日本記曰ク

岩代のはままつかえを引むすひ

月やあらぬはるやむかしの春ならぬ  
わか身ひとつはもとのみにして  
是をとる哥

春やあらぬ花やむかしにかわるらん  
なかめしわれはもとの身なれと  
本譚の上下おうちかへたる哥

おもふ事いはてた、にややみぬへき  
われとひとしき人しなけれは  
とあるうたをとりて

われとなとひとしき人のなかるらん  
おもふことの葉いかていはまし  
大意をとる哥

けふこすはあすは雪とそちりぬへき」一二ウ  
きえすはありとも花とみましや  
とあるうたを

けふこすは明日は雪とそ古郷の  
はるもむかしの人や恋しき

本哥をとりて本哥にせんにはかくのことく心  
得てよむへき也このほか本哥をとる躰無名  
抄にみえたりたつねみへし

『竹園抄』翻刻

身にさちあらはとかんとそおもふ  
是は有馬の王子の御哥なり三葉四葉三棟四  
棟なり本文云

楊国忠<sup>二</sup>依<sup>テ</sup>楊貴妃之寵家榮三棟四棟に」一四オ  
いれり

一 本哥を取に四の様有事一には言葉を取<sup>ル</sup>二には  
心を一に言葉をかへ三には本哥の上下句をうち  
かへて取四には本哥の大意をとるなり言葉かわら  
すして心一なる哥

梅の花これとも見へす久かたの  
あまきる雪のなへてふれ、は  
是をとる哥

梅の花それともほふ久かたの  
あまきる雪のなへてふれ、は」一四ウ  
心を一にして言葉はかふる哥

花やあらぬ春やむかしの春ならぬ  
わか身ひとつは本の身にして

是を取哥  
春やあらぬ花やむかしにかわるらん  
詠し我れは本の身なれと

六返事躰事

誦をよまんとは哥の事すへきやうをよくく心得へき  
なりあしく返事をして人にとかめらる事有

それに四のしな有<sup>一ニ</sup>われよりうへの人の哥には  
後の句のおわりをわか句のうへにいた、きてよむ

なり<sup>二ニ</sup>おなしほとの人には上下の句お合て<sup>一ニ</sup>オ  
なかはいつれをもとるなり<sup>三ニ</sup>われよりおとりたる

人の返事おは彼かうたのかしらをとりてわか  
哥の末におくなり<sup>四ニ</sup>あふむ返事とて口まね

おするやうによむなり是かならず上下をいはず  
又此外は近來のうたにた、大意はかりをとり

てよむやうあり

一われよりまさりたる人の哥

おもひとけはあはれなるへき夕へ哉

なにとて人をまちならひけん

返事に

まつらんとおもひもよらし数ならぬ

うき身をなけくたくれの空

二おなしほとの人のお返事に<sup>一ニ</sup>ウ

しのふ山忍ひてかよふみちもかな

本哥の上下をうちかへたる哥

思ふこといはてた、にややみぬへき

我とひとしき人しなれば

と有哥を取て<sup>一五</sup>オ

我となどひとしき人のなかるらん

思ふことのはいかていまし

大意を取哥

けふこすはあすは雪とそちりぬへき

きへすはありともはなと見ましや

と有哥を

けふこすは明日はゆきとそ古郷の

花もむかしの人や恋しき

本哥を取て本哥にせんにはかくのことく心得

て読へき也此外本哥を取躰無名抄に見へ<sup>一五</sup>ウ

たり尋見るへし

六

返事躰之事哥を読人は哥の返事すへき様

をよくく心得へきなりあしく返事をして人に

とかめらる、こと有それに四のしなあり一には我よ

りうへのひとの哥には後の句のおはりを我か句  
の上へにいた、きて読なり二には同じほとの人

人の心のおくもみるへき  
返事に

しのふ山しのふかひこそなかりけれ

人の心のおくのあさゝに

三われよりおとりたる人の哥の返し

晨明のつれなくみえし別より

あかつきはかりうき物はなし

返事

とりのねをうきものそとて恨しは

あかぬわかれのありあけの空

四鸚鵡返事

おもへともおもはぬとのみいふならは」一三オ

はなやおもはしおもふかひなし

返事

おもへともおもはぬなはいふ事も

いなやよしなししのふかひなし

およそ返事の駄さまくなりといへとも此四種

おもつて本とす是をよく心得わけた簡して

返誦おはすへき物なり

七哥の題をそんしする事いかにうたをよまんと

には上下の句を合て中をいつれをも取也三には我よりおとりたる人の返事をは彼れか哥のかしらを取て我うたの末に置也四にはあふむかへしとて口まねをする様に読也上下をいわすまた此外は」一六オ  
近來のうたにたゝ大意はかりをとりてよむ  
様あり

一 我よりまさりたる人の哥

思ひとけはあはれなるへき夕かな

なにとて人を待ならひけん

返事

待らんと思ひもよらし数ならぬ

うき身をななく夕くれの空

二 同しほと人の人の哥に

しのふ山忍て通みちもかな」一六ウ

人の心のおくもみるへし

返事

しのふ山しのふかひこそなかりけれ

人の心のおくのあたしに

三 我よりおとりたる人の哥

有明のつれなく見へし別より

おもふとも題をあしく心得つればひか事を、く

し哥にあらすよくこの様を心得へし題に

おいて落題片題傍題とてあり落題といふ題

をよむとおもひてよみたれとも落題となる哥

あり忍恋といふ題にてはいかにもしのひたる心を」一三ッ

よむへきにあまり心をふかくいはむとてしのひあまりて

人にしらるゝよしをよめは忍恋にはにたれとも

落題となる山家すまひを題にてよむにあやまり

やまふかくすむよしをいひて庭籬ともいへの心ちな

る事をはよまぬ哥ありこのほかかゝることおほかるへし

名月の題をつねの月によみぬれば落題となる

なり名所の心なれば落題となる物なり本哥

忍恋のらくたひ

なをさりにあるまでこそはしのひけれ

こひすと人にもらしぬるかな

家の落たひ

里とをきみ山のおくのしるへには

聞こそなければみねのまつかせ」一四オ

明月の落題

ふくる夜の月におきいて明すなよ<sup>(二)</sup>

あかつき斗うきものはなし

返事

鳥のねをうき物そとて恨しは

なかぬ別の有明のそら」一七オ

四 鸚鵡かへしうた

おもへとも思はぬとのみいふなみは

いなやおもはしおもふかひなし

返事

思へともおもはぬ中はいふ事も

いなやよしなし忍ふかひなし

およそ返事躰さまざまなりといへとも此四種

をもつて本とす是をよく心得わけてれうけん

して返哥をはすへきものなり

七 哥の題を存知する事いかに哥をよまんと思」一七ウ

とも題をあしく心得つればひかことおゝく

して哥にあらす能此様を可心得題におおて

落題片題傍題とて有落題と云は題をよむ

とおもひてよみたれとも落題となるうたあり

忍こひといふ題にていかにも忍ひたる心をよむ

へきにあまり心を深くいはいんとて忍ひあまり

物おもふことは秋にそありける

名所花の落題

山さくらわきてさかりになりけり

所からにてはるもみるへき

かくのごとくならむはみな落題になるへし

海邊月

清みかたふけ行浪にきりはれて

うらの外あくる在明の月

いかにも題をほむる心地におもひいれて哥をは

よむへきなりいかにおもしろき哥なりとも題を

わろくよみぬれはうたにあらすたゝしいたりて心」一四ウ

のふかきうたいてきたらは少々題あしくとも出すへき

なりまことによき哥になりぬれは題のなんは

なきものなり片題の事はうへにいふかことし傍

題の哥と云はむねとよむへき題をさしおきて

そはなるものをもつはらにほむる哥なり是は

ことにおかしきことなるへし本調月を題にて

月夜にはひかりそまさる玉川の

卯花かこふ里をとほはや

これは月おほそはにして卯花おほめたる哥なり

人にしらるゝよし読は忍恋にはにたれとも

落題となる山家の住まひを題にて読にあ

まり山深くすむよしをいゝて庭籬とも家

の心なる事をは読ぬ哥有此外かゝること」一八オ

おゝかるへし名月の題を常の月に読みぬれ

は落題となる物なり 本読

忍恋の落題

なをさりにあるまでこそは忍ひけれ

恋すと人にもらしぬるかな

山家の落題

里遠きみ山のおくのしるへには

聞こそなるれ嶺の松かせ

明月の落題

ふくる夜の月におきめて明すなよ」一八ウ

ものおもふことは秋にそ有ける

名所花の落題

山桜わきてさかりに成にけり

処からにそ花も見るへき

かくのごとくならんはみな落題に可成

海邊の月

余これにてしるへしつねに人のあやまることなり

題をよく心得へし

八懐紙可書事

抑又譚には懐紙およくく「心得へきなり上方に」一五オ

は四季に四色の紙を用るなりそれも近代は

つねの紙を用る也その懐紙を書に二条六

条の両家にかわりめ有まつ二条家につかは二

首三首の題は一紙にかくへきなり二首の題に

なりぬれは口六寸置て詠字をかくへし詠字何

首の和譚といふ事は上古は一字書たりしを近來

は引つ、けて一寸はかり引下て書なり詠と題と

のあい一寸也詠より一寸はかり引下て題の首を

書へしいく文字の題もこれはかはるへからす

譚をは詠字同頭に書へし題と哥と又一寸へたつへき也

わか名をは題と詠との間にあて、書へし有官の

人は官姓名無官の人は姓名を書へし僧は名児は

姓名を書へし女房は名はかり書へき也又祝哥になり」一五ウ

ぬれは三行三字書へし此時は二首の哥なりとも詠題

のあいたの口四寸おいて書へし間は五分なるへし三首の哥

はかくのことし一首の哥は二首の哥のことくにして一

清みかたふけ行波にきりはれて

うちの外あくる在明の月

いかにも題をほむる心地におもひ入てうたを

も読へき也いかにおもしろき哥なれとも」一九オ

題をわろく読ぬれは哥にあらす但いたりて

心のふかき哥出来たらは少題あしくとも出ス

へきなりまことの哥になりぬれは題のなんは

なきもの也片題のことほうへに云かことし

傍題の哥と云はむねと読へき題をさし

おきてそはなる物を専らほむる哥也此にことに

おかしき事なるへし本哥月を題にて

月夜にはひかりそまさる玉川の

卯の花かこふ里をとほ、や

是は月をそはにして卯花をほめたる哥也」一九ウ

余是にてしるへし人の常にあやまる事

なり題をはよく心得へし

八 懐紙可書事

抑又哥には懐紙を能心得へき也上方には

四季に四色の紙を用る也夫もまた近代は

常の紙を用る也其懐紙を書に二条六条の

紙のうちをまくはりて書へし一首は三行三字に書へ  
きなり四首五首にもなりぬれば上下二行に書へき也  
哥にまする真名は信にかくへしさうに書ぬれば  
かなにまきる、也書と、むるてにはをはまなに書  
事非説也作者をかくにまきる、なりわか名を  
いかにも賤なして懐紙のしもをつめて書へし  
すそわつかにさしけてかくへからすあくるは貴  
人の振舞也

二行半 常恒の三首二首の躰

詠三首和調一六オ

千鳥

藤原忠輔

なきてゆくかたをのうらの  
さ夜ちとりよさむにありや  
こゑのうらむる

庭上雪

われたにもあとつけかたき  
庭の雪を人のとはぬも  
うらみさりけり

忍恋

いかてかはおもふとたにも

『竹園抄』翻刻

二家にかわりめ有先二条家につかは二首三首  
の題は一紙に書なり二首の題に成ぬれば口六寸  
置て詠字を書へし詠の字はかみ一寸おきて

書なり詠字何首の和哥といふことは上古は」二〇オ  
一字書たりしを近來は引つ、けて一寸はかり

引下てかく也詠と題との間一寸也詠より一寸

はかり引さけて題を書云文字の題も是は

かはるへからす哥をは詠字同しかしらに書

へし題と哥と又一寸へたつへき也我名は題詠

との間にあて、かくへし有官の人は官性名

無官の人は姓名を書へし僧は名児は姓名

を書へし女房は名はかり書なり又祝哥

になりぬれば三行三字かくへし此時二首の

哥なりとも詠題の間の口四寸おめてかくへし」二〇ウ

間は五分なるへし三首の哥はかくのことし

一首の哥は二首の哥のことくにして一紙の内

をまくはりて書へし一首は三行三字に書へ

きなり四首五首にも成ぬれば上下二行に書へし

哥にまする真名は信に書へきなりさうに

書ぬればかなまきる、こと多しきき留てには

しらせましつゝむに恋は

くるしかりける

三首哥如此祝の哥は三行三字に書へし」一六ウ

詠哥松祝和哥近代は如此も書

詠一首和謔

寄松祝

君か代ののとかに

すめるいけ水にちよのか

けさすきしのひ

めまつ

五六首より百首にいたるまでは此躰にかはりて

た、二行に書へし又艶書キヤウキの哥は

四三二四三二四三二四三二とかくなりふみのかくにも

また袖かきにもせよ是を心得て書へしたとへは

しのひね おもふ

のなみ と

た」一七オ

はいろに とふ人

いてぬ もな

れ し

をはまなにかくこと非説なりさくしやをかくに

まきるゝなり我名をいかにも賤なして懐紙の

下をつめて書へしすそ路にさしあけて

書へからすあくるは貴人の振舞なり」二二オ

二行半 常恒の三首二首の躰

詠三首和哥

千鳥 藤原忠輔

なきてゆくかたをのうちの

さ夜千鳥よさむにありや

こゑのうらむる

庭上雪

われたにもあとつけかたき

庭の雪を人のとはぬも」二二ウ

うらみさりけり

忍恋

いかてかはおもふとたにも

しらせましつゝむに恋は

くるしかりける

三首哥如此祝の哥は三行三字にかくへし

とものや

又札の哥は二行にも三行にも書てあまる字を下  
に書と、むる也

待よひのふけゆくかねのこゑ

きけはあかぬ別の鳥は

ものかわ

かやうにかくなり

内裏院家には懐紙のうへをつゝみて左右なく文

臺をかすかたわらにおくなり大臣家諸

卿の家のはうへおつゝます文臺にかぬなり

おなしきの人のもとにてはわかおおくへき所をさしはらひ」一七ウ

ておくへしくはしくは詠詠集にあり六条家には懐紙

様二条家にははらす三首も二首も三行四字に書

なりその外はおなし事なるへしかべはしらなど

には名をかゝぬ事あり是はいたく哥よみとしら

れぬ人のしとけなき躰にする事也女房は懐

紙に名をかゝぬ事あり又哥をも遠所の哥の

様にかくことあり是もいたく哥よみとしられぬひ

め御前などのしとけなき躰にするなり女房なり

とも名人になりぬれはおとこのことくなるへし児は

詠寄松祝和哥近代如此も書

詠一首和哥

寄松祝」二三オ

きみか代ものとかに

すめるいけ水に千代

のかけさすきしのひ

めまつ

五六首より百首にいたるまでは此躰に

かはりてたゝ二行にかくへし又艷書の

哥は四三一四三一四三一四三一と書也文にかくにも

また袖かきにも是心得て書へしたとへは

(一行空白)」二三ウ

しのひね

のなみ おもふ

た と

は色に とふ人

いてぬ もな

れ し

少々おとなしきもそのかわりあるへからず法師  
もかくのことし

九和譚講作法事つねの披講には五種の事をおこ

のふなり和哥衆いまた会所にあつまらざるとき」一八オ

かねて座躰をしたくすへしその様はまつ人丸を右に

懸高貴大明神を玉津嶋左に書へしその外の

影ともあらは官家階にしたかひて左右にかく

へきなり明神人丸の前に文机をコツヅエ置つねのことし

花瓶香爐燭臺菓子壇供等常のことし机の前に

文臺をすゑへし文臺の右に円座をしくへし

読師の座なりまた左のきはに円座あり講師

の也左右にたゝみをなかくしきて上藤の座

をつくりてその次に管絃者伽陀師の座をつくるへし

執筆は座不定也いつくにもしかるへし器量を撰

へし

座席事図部楽なり」一八ウ

〔会席図〕一九オ

さて会衆花座にのそまんにはめんくゝに座つほを存

知して着座せぬさきにひさまつきて戸をあけて

入て畏て文臺のきはにさしよりて左の手を

とものや

〔三行空白〕二三オ

また札の哥は二行にも三行にも書てあまる

字を下に書とむる也

待よひのふけ行かねのこゑ

きけはあはぬ別かの鳥は

ものかは

か様に書なり

内裏院家には懐紙のうへをつゝみおく

なり大臣家諸卿の家のはうへをつゝます」二三ウ

文臺はおかぬ也等閑の人の所にてはわかをく

へき所をさしはからいてをくへしくわしく

は哥詠集有六条家には懐紙躰二条家に

かはらす三首も二首も三行四字に書也その外

は同し事なるへしかへはしらなとに哥を

かくには名をか、ぬ事有是はいたく哥よみ

としられぬ人のしとけなき躰にすることなり

女房は懐紙に名をか、ぬ事有又哥をも遠所

の様にかく事有是もいたく哥よみとしられ

地につけてつい居て右の袖の下より懐紙おとり  
いたして文臺のすへにおくへし衆みな集て座つ  
ほくくに居さたまりて惣衆の樂伽陀朗詠などお  
わりて式師しつかにあよみよりて礼盤につく  
なり常の作法のことく伽陀朗詠の祝言等しかる  
へきなり式はおわりて読師あよみよりて下主  
の哥よりはしめて次第に哥をよみあくる  
なり初の詠はさしこゑ次二篇目より満座同音  
にこゑおのへて詠するなりさて次第に懐紙を  
かさぬれば下臈は下になり上ろうはうへになるなり」一九ウ  
かさねたる懐紙を文臺に置て読師本座に帰れ  
は又次に講師さしより哥の善悪をさしこゑ  
にいふなり此とき満座おもひくに難おも陳おもす  
へし當座にこと落居せすは判者のもとへたつねへし  
若當座に判者あらは餘の役をのそきて哥判をも  
こひて事をさたまへし披講おはりて読師何  
首をか、すつきかたには詠の字をか、さるゆへに詠と  
初にあけぬ何首といふ事を詠するなり大和哥と  
よみあくる也不通の哥には詠す十首の和哥と詠して  
次に題の名をよむなりつきに哥をかりてすなわち

『竹園抄』翻刻

ぬひめ御前などのしとけなき躰にする也女房」二四オ  
なりとも名人になりぬれば男のことくなるへし  
児は少々おとなしきもそのかわり有へからす  
法師もかくのとし

九

和哥披講作法事常の披講には五種の事

をおこなふ也和哥衆いまた会所にあつま  
らざる時かねて座躰をしたくすへし其様は  
先人丸をかけ高貴大明神を玉津嶋左にかくへし  
其外の影ともあらは官家階にしたかひて左  
右にかくへき也明神人丸の前に文机を置常  
のことし花瓶香爐燭臺菓子壇供等常」二四ウ  
のことし机の前に文臺をすへへし文臺の  
右に円座をしくへし読師の座なり中に  
礼盤有式師の為なり左右にたゝみをなかく  
しきて上臈の座をつくりて其次に管絃  
者伽陀師の座をつくるへし執筆は座不定  
なりいつくにもしかるへし器量をえらろふへ  
し

〔三行空白〕二五オ

〔会席図〕二五ウ

連譚あるへし連譚のすへほとより酒宴なとす

ぎてやかてかならず管絃にて立へし哥を詠せんととき

は下座はあなり地にたかく詠せず上方のこゑを」二〇オ

うけて微音詠吟すへきなり難陳すへのものすゝろ

にすれはひろふなりいかにも秀逸を相待へき也よく

此むねを心得わけて和哥所にてへきなり

十名物の題を存知する事

もし難波江の哥をよまんには葦はみえずとも

よむへし明石さらしなにてはくもりたる夜なり

とも月のあきらかなるよしをよむへし吉野

志賀ては花ちりて後なりとも花の有やうによむ

へき也そうして名物名所にてはそのときなくと

もあるやうによむへきなり花時月雪みなく

けうあるやうによみなすへきものなり

十一 風躰十様有事

一ニ、長高哥二褌廣譚三にてはた、しき譚四理」二〇ウ

至極する哥五戯たる哥六物にすかりたる哥七古躰

八詞ことに心を入たる哥九心をのこすうた十に物

にすからざる譚なり

第一長高譚

さて会衆花臺にのそまんには面々に座つほ

を存知して着座せぬさきにひさまつきて戸を

明て入て哀て文臺のきわにさしよりて左の

手を地につけてつゐるて右の袖のしたより

懐紙をとりいたして文臺のすゑにおくへし

衆みな集て座つほく居定まりて惣衆の

楽伽陀朗詠などおはりて式師しつかにあよみ

よりて礼盤につくなり恒の作法のこく伽陀

朗詠の祝言等しかるへきなり式おはりて読

師あよみよりて下主の哥よりはしめて次第に」二六オ

哥を読あくる也初の哥はさしこゑ次二篇目より

満座同音にこゑのへて詠する也さて次第に

懐紙をかさぬれば下藹は下になり上藹はうへに

なる也かさねたる懐紙と文臺におきて読

師本座に帰れば又次に講師さしより哥の

善悪をさしこゑに云也此時満座おもひくんに

難をも陳をもすへし當座にこと落居せず

は判者の本へ尋へし若當座に判者あらは

余役をのそひて哥の判をもこひたるをさた

むへしさて披講おはりて読師の何首をかか」二六ウ

このたひはぬさもとりあへず手向山

紅葉のにしき神のまに〜

第二裸廣誦

おもふにはしのふることそまけにける

色に出しと思しものを

第三てにはをた、しき哥

有明のつれなくみえし別より

あかつきはかりうき物はなし

第四理至極するうた」二一オ

偽のなき世なりせはいかはかり

人のことの葉うれしからまし

第五戯たる哥

鶯の花をぬふてふかさはいさ

おもひおつけよほしてかへさん

第六物にすかりたる哥

風吹かは空によききるあわ雪の

おもわぬかたにふるわか身哉

第七古鉢誦

神あつめみとのまくはいせし日より

ちきりそふかき月よみのもり

すつきには詠の字をか、さるゆへに詠と初に

あけぬ何首といふ事を詠するなり大和哥

と読あくる也不通の哥には詠す十首の和哥

と詠して次に題をよむなりつき哥にをはりて

則連哥あるへし連哥のすゑほとより酒宴

など過てやかてかならず管絃にて立へし哥を

詠せんときは下座はあなちたかく詠せず

上方のこゑうけて薇音に詠吟すへき也

難陳すゑの物すゝろにすれは披露披露なりいか

にも秀逸を相待へきなりよく此旨を心得分」二七オ

て和哥所に出へきなり

十 名物の題を存知する事

若難波江の哥を読んには葦などみへすと

よむへし明石さらしなにてはくもりたる夜

なりとも月のあきらかなるよしを読へし吉

野志賀にては花ちりて後なりとも花のある様

に読むへきなり惣して名物名所にては其

ときなくとも有ル様によむへき也花時鳥月

雪みなくけうある様によみなすへきなり

十一 風鉢十様有事」二七ウ

第八言毎に心を入たる哥

夜をさむみきは氷たとへつ、<sup>二二ウ</sup>

かさねてかへる志賀のうらなみ

第九心を残す哥

我が恋は松をしぐれの染かねて

まくすか原に風さわくなり

第十物にすからざる哥

恋ひしともいはてやはてんかすならぬ

身のうきほとをうちなけきつ、

およそ哥お、しといへともこの十躰にすくへ

からす此外は善白等の躰ありならふへし是

は家の秘事なり初心の為にしるす也ゆめく、他

見あるへからす為顯入道殿の御子為家卿小童の時

竹苑苑にておしへたまへるなり又為家卿民部

卿入道殿言を書給ともいへり是はさらに世間に<sup>三三オ</sup>

披露なき書なりよく、可秘義也

(十二行空白) <sup>三三ウ</sup>

五音次第

あいうゑお かきくけこ

さしすせそ たちつてと

一には長ヶ高哥<sup>二</sup>には襪廣哥<sup>ハタハリ</sup>三にはてにはた

たしき哥四には理至極する哥五には戯たる

哥六には物にすかりたるうた七には古躰八には

詞ことに心を入たる哥九には心をのこすうた

十には物につからざる詠なり

第一長高哥

このたひはぬさもとりあへず手向山

紅葉のにしき神のまに、

第二襪廣歌

思ふには忍ふることぞまけにける<sup>二八オ</sup>

色に出しと思ひしものを

第三てにはた、しきうた

在明のつれなくみへし別より

暁はかりうき物はなし

第四理至極するうた

偽のなき世なりせはいかはかり

人のことの葉うれしからまし

第五戯たる哥

鶯のはなをぬふてふかさはいさ

思ひをつけよほしてかへさん<sup>二八ウ</sup>

なにぬねの　　はひふへほ  
まみむめも　　やゐゆゑよ  
らりるれろ　　わいうえを

あいうゑをひゝきなし

伊い路ヲ　半あ　尔い　暮ヲ　邊へ　登ヲ  
置い里い、怒ウ　留ウ　越ヲ　和あ　賀あ  
夜ヲ　堂あ　連え　楚ヲ　川ウ　柵え　那あ  
羅あ　無ウ　宇ウ　井い　乃ヲ　於ヲ　俱ウ  
屋あ　満あ　気え　婦ウ　古ヲ　ええ　傳え」二三オ  
阿あ　散あ　幾い　遊ウ　免え　見い　志い  
衛え　飛い　裳ヲ　勢え　須ウ」二三ウ

〔五音図〕「二四オ

第六物にすかりたるうた

風ふけは雲によこさるあわ雪の

おもはぬかたにふるわか身哉

第七古鉢うた

神あつめみとのまくはいせし日より

ちきりそふかき月夜みの森

第八言毎に心を入たるうた

夜をさむみみきはの氷單つ、

かさねてかへる志かのうら波

第九心を残すうた」二九オ

わか恋は松を時雨の染兼るて

まくすか原に風さはくなり

第十物にすからさるうた

恋しともいはてやはてん数ならぬ

身のうきほとをうちなけきつ、

およそ哥おほしといへとも此鉢にすくへか

らすこの外は善白等の鉢有ならふへし

是は家の秘事なり初心の為に記すなり

ゆめ／＼他見有へからす為顕入道殿の

御子為家卿小童のとき竹苑にてをしへ」二九ウ

たまふなり亦為家卿民部卿入道殿言葉  
を書給ともいへり是は更に世間に披露  
なき書也よくく可秘義なり

竹苑抄卷

(五行空白) 三〇オ

五音次第

あいうゑお かきくけこ  
さしすせそ たちつてと  
なにぬねの はひふへほ  
まみむめも やゐゆゑよ  
らりるれろ わいうえを  
あいうゑおひゝきなし

(二行空白) 三〇ウ

伊イ 路ヲ 半ア 耳イ 暮ヲ 邊へ 登ヲ  
置イ 里イ 怒ウ 留ウ 越ヲ 和ア 賀ア  
夜ヲ 堂ア 連エ 楚ヲ 川ウ 祢エ 那ア  
羅ア 無ウ 宇ウ 井イ 乃ヲ 於ヲ 具ウ

屋<sup>ア</sup> 満<sup>ア</sup> 気<sup>エ</sup> 婦<sup>ウ</sup> 古<sup>ラ</sup> え<sup>エ</sup> 傳<sup>エ</sup>  
 阿<sup>ア</sup> 散<sup>ア</sup> 幾<sup>イ</sup> 遊<sup>ウ</sup> 免<sup>エ</sup> 見<sup>イ</sup> 志<sup>イ</sup>  
 恵<sup>エ</sup> 飛<sup>イ</sup> 裳<sup>ラ</sup> 勢<sup>エ</sup> 須<sup>ウ</sup> 三<sup>一</sup> オ

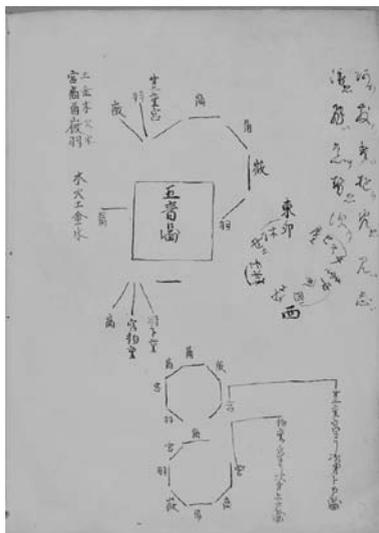
〔五音図〕三二ウ

ワ <sup>ウ</sup>	ラ <sup>ル</sup>	ヤ <sup>ユ</sup>	マ <sup>ム</sup>	ハ <sup>フ</sup>	ナ <sup>メ</sup>	タ <sup>リ</sup>	サ <sup>ス</sup>	カ <sup>ク</sup>	ア <sup>ウ</sup>
ウ <sup>ウ</sup>	ル <sup>ル</sup>	ユ <sup>ユ</sup>	ム <sup>ム</sup>	フ <sup>フ</sup>	メ <sup>メ</sup>	リ <sup>リ</sup>	ス <sup>ス</sup>	ク <sup>ク</sup>	ウ <sup>ウ</sup>
ウ <sup>ウ</sup>	ル <sup>ル</sup>	ユ <sup>ユ</sup>	ム <sup>ム</sup>	フ <sup>フ</sup>	メ <sup>メ</sup>	リ <sup>リ</sup>	ス <sup>ス</sup>	ク <sup>ク</sup>	ウ <sup>ウ</sup>
ウ <sup>ウ</sup>	ル <sup>ル</sup>	ユ <sup>ユ</sup>	ム <sup>ム</sup>	フ <sup>フ</sup>	メ <sup>メ</sup>	リ <sup>リ</sup>	ス <sup>ス</sup>	ク <sup>ク</sup>	ウ <sup>ウ</sup>
ウ <sup>ウ</sup>	ル <sup>ル</sup>	ユ <sup>ユ</sup>	ム <sup>ム</sup>	フ <sup>フ</sup>	メ <sup>メ</sup>	リ <sup>リ</sup>	ス <sup>ス</sup>	ク <sup>ク</sup>	ウ <sup>ウ</sup>
ウ <sup>ウ</sup>	ル <sup>ル</sup>	ユ <sup>ユ</sup>	ム <sup>ム</sup>	フ <sup>フ</sup>	メ <sup>メ</sup>	リ <sup>リ</sup>	ス <sup>ス</sup>	ク <sup>ク</sup>	ウ <sup>ウ</sup>
ウ <sup>ウ</sup>	ル <sup>ル</sup>	ユ <sup>ユ</sup>	ム <sup>ム</sup>	フ <sup>フ</sup>	メ <sup>メ</sup>	リ <sup>リ</sup>	ス <sup>ス</sup>	ク <sup>ク</sup>	ウ <sup>ウ</sup>
ウ <sup>ウ</sup>	ル <sup>ル</sup>	ユ <sup>ユ</sup>	ム <sup>ム</sup>	フ <sup>フ</sup>	メ <sup>メ</sup>	リ <sup>リ</sup>	ス <sup>ス</sup>	ク <sup>ク</sup>	ウ <sup>ウ</sup>
ウ <sup>ウ</sup>	ル <sup>ル</sup>	ユ <sup>ユ</sup>	ム <sup>ム</sup>	フ <sup>フ</sup>	メ <sup>メ</sup>	リ <sup>リ</sup>	ス <sup>ス</sup>	ク <sup>ク</sup>	ウ <sup>ウ</sup>
ウ <sup>ウ</sup>	ル <sup>ル</sup>	ユ <sup>ユ</sup>	ム <sup>ム</sup>	フ <sup>フ</sup>	メ <sup>メ</sup>	リ <sup>リ</sup>	ス <sup>ス</sup>	ク <sup>ク</sup>	ウ <sup>ウ</sup>

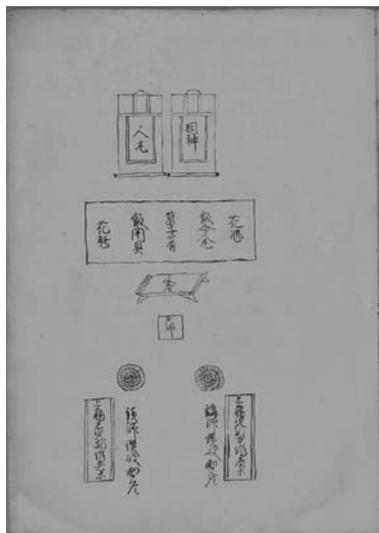
在口傳

三二オ

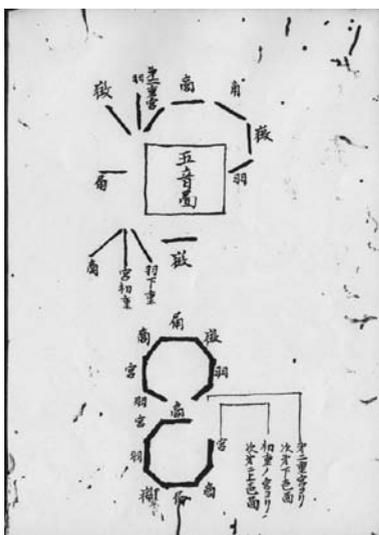
系 あ や ら  
ひ さ ま む  
も き け う  
せ ゆ ふ ゐ  
す め こ の  
「 み え お  
三 し て  
ウ く



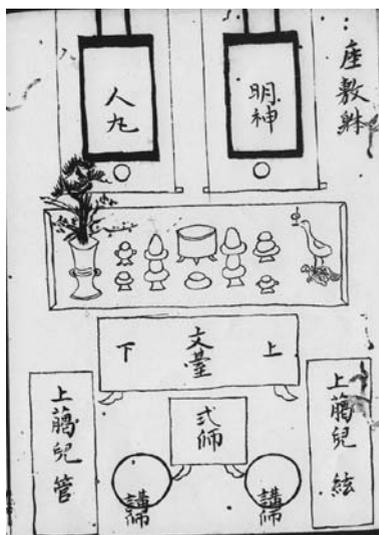
早大本〔五音圖〕



早大本〔会席圖〕



刈谷本〔五音圖〕



刈谷本〔会席圖〕

校勘記

- (1) 重ね書き。下の字は不明。
- (2) 重ね書き。下の字は「れは」
- (3) 重ね書き。下の字は未詳。
- (4) 重ね書き。下の字は未詳。

付記

早稲田大学中央図書館、刈谷市立中央図書館に、閲覧と掲載の許可を賜り、深く御礼申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費(課題番号 18J14018)による研究成果の一部である。

(うめだ けい 早稲田大学非常勤講師／早稲田大学日本古典籍研究所招聘研究員)  
(あさい みほ お茶の水女子大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員)